

2022年5月13日

『しあわせなときの地図』

今月の15日をもって、沖縄復帰50周年を迎えます。若い世代の方はピンと来ないかも知れませんが、1972年の復帰とは北緯28度以南の日本領がアメリカから日本に返還されたことを言います。つまり、1945年の終戦から27年間、沖縄はアメリカの占領下であり、日本の治政権は認められていなかったのです。それまで沖縄では、市中通用する紙幣や硬貨も、交通ルールもアメリカ国内と同じでした。沖縄の人々は、歴史的な時代区分を「〇〇世」と表現し、アメリカ占領下の27年間を「アメリカ世」と呼んでいます。

ところで、第二次世界大戦末期の沖縄における戦いについては、皆さんも多くのドキュメンタリーや小説で読んだこともあると思います。5月の朝礼でも話したように、この戦いで日米を中心に双方で22万人以上の尊い命が奪われ、民間人だけでも12万人を越えると伝えられています。もちろん人的被害だけでなく、多くの建物や自然などもあらゆるものが破壊されました。

第二次世界大戦後の日本の教育の中では、戦前の日本軍や政治・社会、世相のもつ問題点を追求するというより、どちらかと言えば『ひめゆりの塔』『白旗の少女』など物語や映画の中で個人の問題として描いて来たのではないのでしょうか。それは、広島・長崎の原爆被害についても同様です。その意味で戦争のもつ無意味さ、悲惨さについて教育的な効果はあったと感じていますが、国家の問題として十分に議論し、扱って来なかった点は今後の私たちの課題に残されています。それが未だに解決しない周辺国との問題の前に立ちはだかっているのではないのでしょうか。

翻って、現在のウクライナで起きている惨状もしかりです。奪われた尊い命、過酷な避難生活、壊れた建物や道路などに目が行きがちですが、この戦争の本質的問題は何かということ、なぜ休止できないかという問いを、道義的問題倫理的問題からさらに深掘りして考える必要があるでしょう。ウクライナの物理的被害だけでも13兆円を超えると報道もあり、勝者敗者に関わりなく、長い年月を掛けて築かれて来た歴史や文化の破壊にも視点を投じる必要があるのです。

こうした中、書店で一冊の絵本と出会いました。フラン=ヌニョ文、スザンナ=:セレイ絵、宇野和美訳(2020)『しあわせなときの地図』ぽぷら出版です。戦争により町を出て行く前夜、主人公の少女は住んでいた町の地図を広げて楽しかった場所を指でたどっていくのです。地図は単なる1枚の紙に過ぎませんが、そこには多くの人々の顔や生活が…。さて、皆さんはどう思うのでしょうか。

校長 石飛 一吉